

還相の廻向に就いて

禿 諦 住

『淨土眞宗』の内容は、それが十方衆生の本質的・最後の願望を代表せる法藏菩薩の五念門の修行に於ける第五、廻向門の因果としての往相・還相の二廻向であると云ふことは此所に贅語を要せない。而してこの廻向なるものが、代表せられた本願の成就に於て本願そのものの發見せる衆生への表現であるかぎり、往相・還相の二廻向は、その根源本願に於ける法藏のものでありつゝ、それはそのまま、代表せられた衆生の本願の内なるありかたの終始であると云ふことが出来るであらう。従つて宗祖はこれを『教行信證』の冠頭には、

『謹按淨土眞宗有ニ種廻向一者往相二者還相』

と云ひ、又『文類聚鈔』には、

「本願力廻向有ニ種相一者往相二者還相」

と規定せられてゐる。而してこの因果態に於ける往・還の關係は、二利分別の場合にあつて往相の外に還相を認むる

も、因果態に於て往相の證果に還相が攝せられると云ふ關係にあること、又論を俟たず、『正像末和讃』には

「往相廻向の利益には、還相廻向に廻入せり」

と云ひ、或は、

「往相廻向の大慈より、還相廻向の大悲をう」

等と述べられてゐる。即ち、この兩者はそれが菩薩道の實現に於て必然の内容であり、菩薩道の内容に發見せられたる衆生のありかたとして不可缺の兩相である。

然るにその往相の廻向が、

「就_レ往相廻向_ニ有_リ眞實_ノ教行信證_一」

と決定せられて、それが廻向として本願の現實衆生に顯現せる十方衆生の本願に支持せられたりかたであるに對して、還相の廻向とは『教行信證』には、往相の『大無量壽經』に於ける第十七・十八・十一の三願に對し、その第二十二願を以て

「言_ハ還相廻向_ニ者則_チ是利他教化地_ノ益也則_チ是出_{タリ}於_ニ必至補處_ノ之願_一亦名_一一生補處_ノ之願_一亦可_レ名_一還相廻向_ノ之願_一也顯_レ註_一論_一」

と示され、其の内容はこれをその『淨土論』に依りて、

「出_ル第五門_ト者以_テ大慈悲_ヲ觀_シ察_シ一切苦惱衆生_ヲ示_シ應化身_ニ廻_シ入_リ生死闍煩惱林中_ニ遊_シ戲神通_ニ至_リ教化地_ニ以_テ本願力廻向_ス故是名_一出_ル第五門_一」

と云はれ、『文類聚鈔』には、

「願成就文經言彼國菩薩皆當究竟一生補處除其本願爲衆生故以弘誓功德而自莊嚴普欲脫一切衆生」と示されて、淨土に生じ終つて後、(證大涅槃)再び生死轉變の現實界に還來し(示應化身)無礙自在に衆生を教化利益することを意味し、この兩者の必然的なる相が本願力の表現として十方衆生の『淨土眞宗』であると云ふのである。されば、往相のみあつて還相の認むべきものなきは、それが『淨土眞宗』にあらず、還相のある所にも本願の無限に十方衆生を開化すると云ふことである。

然しながら、現實にあつて我々の與へられた智見の理解し得るものは、遂に又現實そのものに限定せられ、往生の彼岸(證大涅槃)を測定することは不可能たることに屬するは云ふまでもない。即ち不可知的なる世界こそが彼岸であり、不可知的なるものは現實界に於て不可知的である他はないであらう。従つて斯かる見地より、淨土は遂に否定せられ、或はそれが觀念的實在であるとして思惟せられたことは、古往今來敢て珍らしきを得ないものである。然るに又事實、本願酬報の實淨土を拒否して、其所に淨土教はその成立の根底を失なふものであることは此所に贅語を要せず、斯かる立場に於て淨土教は、實にそれが單なる道徳を向上せしめんとする爲の一つの譬喩的なる役割を演ずるに過ぎざるものとなるのではないであらうか。即ち此所に於ては又遂に本願は否定せられ、其の一往承認せられた往相の廻向も、この意味に於ては我々の理解を遠ざからざるを得ないものとなるであらう。果して然らば此所に還相廻向は、これを如何に領解することが出来るであらうか。然るにこの間の長き課題に對して、我々は然しながら不可知的なるものを可知的のものとして強ふるが如き勇氣を持つものではない。或は又それを所謂教權的重壓のもとに無條件

に承服することの正當ならざることには就いては、今更に云ふまでもない。即ち我々はその理解に於て、「祖典」に對し最も謙虛であると共に、又一面に承認し得る可能の範圍に於てその論證を明瞭ならしめねばならぬ。斯くて我々は、此所に還相の廻向なるものを如何に領解することが出来るであらうか。

二

然るに還相の廻向とは、それが往相必然の果として一面に衆生にとりては、あるべき世界の相でありつゝ、他面に於て「教行信證」に引用せる『論註』に、

「還相者生_{トハ}彼土_ニ已_テ得_テ奢摩他毘婆舍那方便成就_{スルコトヲ}證大涅槃廻_ニ入_{シテ}生死稠林_ニ教_{シテ}化_ス一切衆生_ニ示_ス應化身_ニ共向_{スルナリ}佛道_ニ」

と云へるが如く、それがそのまゝ、如實に菩薩道の果を實證するものとして理解せられてゐる。即ちこの還相の領解に於てのみ菩薩道の成就を我々は理解せしめらるるものと云つてよいのではないであらうか。何故ならば、前述の如く今假に還相を認めぬ往相なるものを考慮するならば、我々はこの往相の内容に單なる道德的生活の態度を承認し得るとしても、「生」そのものの把握に關して一つの「決定」を持つことは不可能である。然るに事實、佛教の道德と異なる點は、生活それ自體に於て一つの決定を持つことではないであらうか。而してこの決定なるものが、本願に支持せられたりかたとして、『教行信證』に

(1) 「爾者獲_レ眞實行信者心多_ク歡喜故是名_ヲ歡喜地是_ヲ喩_ス初果者初果聖者尙睡眠懶惰不_レ至_ス二十九有_レ何況_ス十

方群生海歸ニ命斯行信一者攝取不捨故名阿彌陀佛一是曰ニ他方一是以龍樹大士曰ニ即時入必定曇鸞大師云ニ正定聚之數一

(2) 「煩惱成就凡夫生死罪濁群萌獲往相廻向心行即時入大乘正定聚之數往正定聚故必至滅度云々」

等と示される如き、それが事實は此所に往相廻向の決定と云ふことを得るならば、それはそのまゝ菩薩道必然の果を實證するものでなければならぬ。而して此の現實に佛道の果を意識せしむるものとしての決定そのものの内容が、所謂傳説の精神によりて支へらるるものであり、支へらるることに依つて可能であると云ふことは理解せらるることであらう。従つて宗祖もこの趣を『教行信證』の冠頭には、

「誠哉攝取不捨眞言超世希有正法聞思莫遲慮」

と云ひ、又、自からの過法に關して、

「爰愚禿釋親鸞慶哉西蕃月支聖典東夏日域師釋難遇今得遇難聞已得聞敬信眞宗教行證一特知如來恩德深一斯以慶所聞嘆所獲矣」

と序してゐる。而して、これに類する宗祖の述懐論證は枚擧に遑なきものであるが、之によりてこれを見るに、傳統の精神なるものは、斯くて此所にこの決定に於て生命を持つものであり、この精神こそが一面に生活の根底となりつゝ、他面にそのまゝ、教化躍動の根底となることは贅語を俟つまでもない。然るに斯かる決定の可能であることは、事實それが傳統の實證に於て可能であり、宗祖が三經の内面的一致を傳統によりて、

「是以四依弘經大士三朝淨土宗師開眞宗念佛導濁世邪僞三經大綱雖有顯彰隱密之義彰信心爲能入云々」

還相の廻向に就いて(禿)

と述ぶるが如く、傳統の實證なくして我々の「生」の把握は遂に不可能と云はねばならぬ。若し然らば、斯かる「生」の決定をあらしむる傳統なるものは、これ實に傳統を認めぬ往相に於ては得られず、まさしくこれ十方衆生を代表せる法藏菩薩の本願を聞く釋尊地上の體験に點せられた法藏菩薩の還相の廻向に創められしものと言ふべきではないであらうか。即ち、この意味は、十方衆生の現實を深く洞察し、十方衆生の本然の願望に呼び醒されたる釋尊の、地上現實に選擇せられ、決定せられたありかたが、そのまゝ、十方衆生の本願の顯現であり、この顯現こそが、本願に於ける法藏菩薩の還相の廻向であると云ふこと、換言すれば、それはそのまゝ、十方衆生の遂にこの本願を持ち、この本願に於て「生」の決定を得るものなることを物語るものではないであらうか。若し然らば還相の廻向とは、それが我々にとりて遂にあるべき世界の相でありつゝ、同時にまた「生」の決定の内面に躍動する傳統の精神であり、傳統の實證そのものではないであらうか。即ち斯くて現實往相の人こそ、實はまた同時に本願の顯現せる還相の人ではないであらうか。従つてかの『高僧和讃』に於ける、

「源信和尚のたまはく、われこれ故佛とあらはれて、化緣すでにつきぬれば、本土にかへるとしめしけり」

と云ひ、或は又『皇太子聖德奉讚』に於ける示現讚仰等は、宗祖の還相に對する領解を此所に理解せしむるものの如きではないであらうか。更に云へば、これ實に『文類聚鈔』に云へる、

「爾者若往若還無有^ハ一事非^{トシテ}如來清淨願心之所^ニ廻向成就^シ也應^ト知^ル」

と云へる領解そのものの仰ぎ見る「生」の把握の具體的内容ではないであらうか。

斯くの如く考察し來るときは、遂に『淨土眞宗』の内容としての還相の廻向とは、それが我々にとりて實に本願力廻向の表現の具體的なるものとして、仰ぎ見る傳統の精神でありつゝ、同時にそれが又我々にとりて本願の内容にあるべき世界として實現せらるるものと云ふことが出来るであらう。

然るに此所に注意せらるべきことは、我々にとりて往相の人こそが還相の人であり、還相がやがてあるべき世界であつても、直ちに往相・還相と現實に執することは避けねばならぬ暴言であると云ふことである。何故ならばたとへ往相が還相と同じく本願力廻向の相であつて、其の本質を等しくするものであつても、往相・還相の二廻向はそれが「二種廻向」であり、「二種相」であるかぎり、自からの現實を以て還相と意識し、或は主張することは如實に本願を領解せる現實往相のありかたではない。即ち我々にとりて現實は又遂に永遠性なき現實でしかあり得ぬことは云ふ迄もない。加之、又現實は遂に有礙であり、無礙自在ではあり得ない。我々はこれに就いて周到なる宗祖の領解に感銘せしめらるるのであるが、宗祖はこの問題の領解に於て、『教行信證』に二廻向を結ぶに當り、

「爾者大聖眞言誠知證大涅槃籍願力廻向還相利益顯正意是以論主宣布廣大無礙一心普徧開化難染堪忍群萌宗師顯示大悲往還廻向慇懃弘宣他利他深義仰可奉持特可頂戴矣」

と述べてゐる。然るに今この「他利他」の深義とは、言ふまでもなく本願に對する衆生の態度であつて、其の根源論註によれば、五念二利の修行成就に就いて、

「然ニ求カニルニ其本ノヲ阿彌陀如來ヲス爲ニ增上緣ト他利之與ニ利他ト談スル有ニ左右シ若自佛ヲ而言ハ宜ハシク言フ利他ト自衆生ヲ而言ハ宜ハシク言フ他利ト」

とあり、即ち佛よりして言へば利他であり、衆生よりしてこれを仰げば、それが他利であると云ふことは、我々にとりてあくまでも他利を仰ぐ生活こそが本願の内なる生活として、そこに菩薩道をあらしむるものであることを警訓せられてゐる。されば斯くて還相はあるべき世界であつても、今ある世界ではなく仰ぎ見る傳統の世界でなければならぬ。即ちこれ『高僧和讃』に、

「彌陀の廻向成就して、往相還相ふたつなり、これらの廻向によりてこそ、心行ともにえしむなれ」
等と示さるる趣のものではないであらうか。

然り而して我々は、次に還相の廻向を以て上述の如く領解し、還相の人を以て仰ぎ見る傳統の精神であるとして決定するとき、それが一部學者の主張するが如き所謂一益法門として、其の間に淨土の存在を否定するものであつたり、或は道德的に先人を追慕し、尊崇するが如きを以て還相の現實への廻向表現となすが如きものは、本質的にその轍を同じくせるものでないことを注意せねばならぬ。即ち還相の考察は此所に淨土の問題を必然的に呼び起すものであり、今これに就いての詳論は之を以下に譲ることとするが、斯くの如く還相の人を以て單に先人の追憶追慕に墮せしめんか、其所には必然的な生活の決定的なる傳統を求むることは遂に不可能であり、斯かる見地より、往相のやがて還相なりとして、其の間に淨土の存在を否定するが如きに於ては、又遂に『淨土眞宗』を如實に領解することは出来ないと云つてよいであらう。果して然らば、此所に還相を理解せしむるものとしての淨土とは、これを如何に領

解することが出来るであらうか。

四

然るに淨土の存在と云ふことに就いて、これをその立説の據とするものは、それが云ふまでもなく淨土教であり、淨土教は此所に此土入聖の聖道教に對してそれが實現を彼岸に期し、安養淨刹に於て入聖證果するをその本義となしてゐる。即ち我々の現實的生命が、現實を越へて彼岸に生を享くると云ふことが淨土教の本義であり、如何に肯定を強いんとするも、遂に否定をまぬがることを得ない現實生命の底を流るる切實なる欲願が、此岸を越へて彼岸を願はしめる所に成立せるものが往生淨土の教であり、これに答へ、之に應ぜんとするものが淨土教である。更に之を現實的に云へば今見る世界の憂悶の人間の現實に於て解決することの不可能なるを自から人間性に於て認知し、まだ見ぬ世界にこれが解決を求め、まだ見ぬ世界に安往を見出すことに於て、現實の生活に立命の據を得んとするものが淨土教である。従つてそれは人類の生存に於て不可避的に欲願せらるる世界であり、十方衆生の欲願に於てある世界が淨土であると云ふことも出来るであらう。即ちこれ淨土が「願土」と云はれ「本願酬報」の土と云はるる所以でなければならぬ。さればこの欲願は、淨土をして有限相對の現實に對し、無限絶對の善美を盡して描かしてゐることは、それが當然のことと云はねばならず、斯かる淨土の欲願に於て存する所に現實の生活が莊嚴せられんとするものであることは、此所に發語を要せない。従つて或る意味に於ては我々の死を受容れんとする態度の、實はこの欲願の存することに於てのものであり、この欲願を絶して我々は必至の死と雖もこれを受取ることは遂に忍び得ざるものとなる

のではないであらうか。されば我々の所謂理性なるものが如何に淨土の存在を否定し續けても、我々の感情がこれを無視することは又遂に不可能であると云つて過言ではないであらう。即ち、斯かる人類生存の底を流るる切實なる欲願によりて産れ、欲願によりて彩られて來たものが淨土であることは何人もこれを否定することが出來ないであらうのみならず、この意味は、そのままに淨土なるものが、十方衆生の欲願に支へられた世界であることを指示せるものなることを物語つてゐる。従つて淨土とはそれが人類の理想の世界であり、この理想に於て統一されんとする所に現實の十方衆生があると云ふことが出來得るならば、まさしく淨土教は、この理想の實現の可能を説く所にその本領があると云はねばならぬ。即ち淨土教が、その教法の内容に於て一切教法の批判を持ち、十方衆生の行動を批判し、規定することが可能であるならば、それはそのままこの理想實現の可能に於てのみ許さるることであり、この理想を放棄して淨土教の説示はその存在の意義を失ふものであらうことは、此所に言を俟つまでもない。果して然らば、斯かる淨土の存在は、十方衆生の欲願に於て可能であり得るであらうか。斯くて又、淨土教はこの可能に對して必然的なものを持つものであらうか。即ち斯かる疑問が淨土教成立の面前に向つて投ぜられねばならず、この淨土の性格を理解せずして我々は如實に還相の廻向を領解することは又遂に不可能と云はねばならぬ。

然るにこの間に對して、十方衆生の願望を代表し、十方衆生をしてこの欲願に呼び醒さんとする使命を有する法藏菩薩の本願なるものが、その使命に於てこの淨土の成立を誓ひ、この誓願の成就に於て、淨土の存在を説くものが淨土教であつて、此所に淨土は報土であり、宗祖の領解に従へば「教行信證」には、

「夫按、報者由、如來願海、酬報果成、土故曰報也」

と云ひ、或は、

「由選擇本願、之正因成就眞佛土」

と述べられてゐる。而して、この淨土成立の本願に願じ、本願の内なる態度に於て十方衆生は、この本願酬報の淨土に往生することを得るとする所に淨土教が成立してゐるのであるが、果して然らば、斯かる淨土なるものは如何にして我々に理解し得らるるであらうか。更に斯かる疑問を追及するとき、我々の現實に於ける一切の生存の設計としての行爲に對し、其の價值批判がこれら一切の行動を價値的に批判してそれらを否定にまで導くとき、我々はその否定せられた價値の認知に於てこれらの内にこれらを超へて十方衆生の欲願を認め、この欲願に應ぜざる本願に參到する必然性を持たしめらるると説くもの(三願轉入)が、『淨土眞宗』であると示されてゐる。若し然らば、此所に淨土とは、それが十方衆生の斯かる欲願の態度に於てあるべき世界であり、十方衆生がこの欲願に統一せらるる所に願生せらるる世界であることは理解し得らるると見てよいであらう。即ちこの意味に於ては、淨土教は十方衆生の本質的最後のなる願望に呼び醒された衆生の、願望の内なるありかたに於て、本願に統一せられ、本願の持つ使命を遂行するの意義を有するものであると云ふことが出来るであらう。従つて十方衆生がこの本願の道を実踐せしめらるる所に實現せるものが淨土であると云ふことも理解し得らるることであり、この意味は畢竟、行詰れる人類の生存設計を根本的に改革すると云ふ結果になるであらう。而して現實的に淨土教の理想とする所ものは、又實にこゝに存すると云ふことも出来るると云つてよいであらう。然しそれはこの行爲のまへに淨土の實現と云ふ事實の成立に於てのことであり、實に在せる淨土の論證に安住を見出すことに於てのみ可能であると云ふべく、若し然らざるときは、淨土とはそれが假

説となり、現實社會の統一のための一つの譬喩的なるものに過ぎざるものとなるであらう。即ち斯かる程度の不安定なる淨土教がその實證を臨終、來迎等の説示に於て希望をつながしむるものではないであらうか。然しながら如實に淨土教が成立するためには、其所に淨土の實在が、我々の「生」の把握に一つの決定を持たしめねばならぬ。即ち先に述べたる往相廻向の決定も遂にその根源をこの決定に置くものであり、この決定に淨土教は成立し、この淨土は斯かる決定をあらしむる所に、十方衆生の現實界に意義を持ち、還相の必然的意義を領解せしむるものでなければならぬ。果して然らば、斯かる淨土教の意義をあらしむる「生」の窮極的な決定者としての淨土は、更にこれを如何に追及することが出来るであらうか。

五

斯くて我々は、これに對して次の如く考慮することが許されぬであらうか。即ち我々は淨土が理想し、欲願せらるゝ世界であつても、既に述べたるが如く、それがまた見ぬ世界であり、従つてこの不可知なる世界を、可知の世界に於て理解し得やうとすることの無謀を企てやうとするものではないが、然しながら、それが十方衆生を代表せる地藏菩薩の因願酬報の淨土を承認せざることに於て、淨土教が我々の「生」の把握を決定し得ざるものであるかぎり、何かの形に於てそれが承認の論據を現實に確立せねばならない。されどこの意味はそれがまた見ぬ世界であるかぎり、それを外的世界に於て感覺的に實證することであつてはならぬことは言ふまでもない。然もこの意味は、それが外的感覺的世界に於て淨土の存在を實證し得ざること、に於て、淨土の存在の否定的條件となるものでないことは言

ふまでもなく、又この意味は個人的主觀に於ける實在、或は否定を決定することの任意であると云ふ意味のものでない。果して然らば之を我々は如何に承認し能ふであらうか。然るにこの問の本質は、主觀的なる「生」の把握に關して、淨土そのものの客觀的證明を要求してゐることであり、この客觀的證明に於て「生」の把握に決定を持たうとする態度であると云つてもよいであらう。然しながら、斯かる意味の客觀とは、それが超個人的主觀に於て意識せらるる自我客觀として理解せられてよいのではなからうか。即ち客觀とは、此の意味に於て内在的實在の認識論的形式によつて論證せらるるものと云ふことになるであらう。

若し然らば、此所に十方衆生の欲願に支へらるる淨土は、この超個人的欲願に於てあるべく、且この欲願に於て立證せらるる世界と云ふことが出来るのではないであらうか。即ち、本願の欲生と云ふことが、『教行信證』に於て、

「言欲生者則是如來招喚諸有群生之勅命即以眞實信樂爲欲生體也」

と領解せられて本願の指示する一味の信樂に於て、之に應ずる衆生の面前に可能であると云ふことは、この事實を逆説せるものと云ふべく、この逆説は、それがそのまゝ淨土の存在を支へられた傳統を仰ぐ心情に於て如實に理解せしむるものではないであらうか。然るにこの傳説とは、それが既に考察し來れるが如く仰ぎ見る還相の人であり、加之この還相の人によつて示さるる傳統を仰ぐの意識は、それがそのまゝ淨土の存在によつて、現實に「生」の把握を決定せられてゐることになるのではないであらうか。而してこれ實にまた、此土彼土の差別觀より提示せられた所謂「指方立相」の説を妨げるものではない。

斯くの如く考察し來るときは、還相の廻向こそ、それが我々にとりてはやがてあるべき世界の相でありつゝ、然も

尙現實に仰ぎみる傳統の世界であり、それがそのまま、實在せる報土によりて我々の「生」の把握を可能ならしむる淨土の最も具體的なる實證者であり、この還相の廻向表現に於てのみ、我々は現實往相に於ける決定を持たしめらるると云ふことが可能となるのではなからうか。果して然らば、斯くて還相の廻向こそ、如實に淨土の存在を實證して、『淨土眞宗』を現實にあらしむる必然の意義を有するものと云ふべきであらう。即ち、これ宗祖が『高僧和讃』に、

「願土にいたればすみやかに、無上涅槃を證してぞ、すなはち大悲をこすなり、これを廻向となづけたり」と讃ぜらるる趣のものではないであらうか。忙中訶筆、あらあら寄稿の約を塞ぐ次第である。